

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 張 文聰

論 文 題 目

関係の近代化—植民地台湾の日本語文学研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学准教授	大井田 晴彦
委員	愛知大学教授	黄 英哲

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、1895年から1945年にわたる台湾の日本植民地時代における、日本語によって「台湾」を対象に書かれた小説を研究対象とし、台湾における近代化の特質を明らかにするものである。その際、ジェンダー研究の視座を用い、宗主国と植民地という配置に基づくアイデンティティの形成とジェンダー・ポリティクス、複数の男性性と植民地統治との協力や拮抗、「女」としての主体性の立ち上がりとその困難などを明らかにした。

本論文は6章構成で3つのテーマに分けられている。1、2章では植民者である日本人はどのように植民地台湾を見たか、そして植民地統治の安定期と戦間期にどのような違いや変化があるかを考察した。第1章「大日本帝国の〈包摂〉と〈排除〉：佐藤春夫の「日章旗の下に」をめぐって」においては、内地人の旅行者であった佐藤春夫の目線から台湾がどのように見られていたかを分析した。第2章「植民地台湾を見る眼差し：庄司總一の「陳夫人」を読む」においては、台湾定住者であった庄司總一に注目し、台湾社会における日本人という設定から、伝統性と近代性の混淆への視線を論じた。3、4章では台湾人男性作家の作品における男性性を分析した。複数の男性性がどのように植民地統治と協力し、また軋み合うかを明らかにした。第3章「植民地下の父と子：張文環の「闍雞」を読む」では、張文環「闍雞」における男性人物を父世代と子世代に分け、近代化の状況は単純に世代に応じるものではないという点を論じた。第4章「秋が清らかで晴れ渡る理由：呂赫若「清秋」論」においては、國分功一郎が提出した「中動態」という概念を使い、協力／抵抗の二項対立におさまらない状況を「非自発的同意」として理解した。5、6章では数少ない女性作家の作品を取り上げ、恋愛、結婚、出産などの問題を考察し、台湾における女性の主体性と近代化との関係を明らかにした。第5章「帝国に抗う女の語りにくさ・読まれにくさ：坂口禰子の「灯」を読みなおす」では、検閲への抗いと女性の語りの創出について考察した。第6章「反逆的な恋愛と結婚：葉陶〈愛の結晶〉を再読する」では、1930年代までの日本プロレタリア文学女性作家の系譜を考慮しつつ、葉陶が提示した女性の連帯の独自性に注目した。これらの考察を通して、植民地台湾における植民地主体の複雑なあり様と関係の近代化のプロセスを解明した。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

台湾の日本語文学研究は、日本においても台湾においても近年活性化しており、着実に研究が進展しているが、本論文はそれらの動向を的確に把握したうえで新たな知見を提出しており、問題設定の独創性や方法意識の明確さ、それに基づいた文学作品の新しい側面の掘り起こしと植民地台湾の特質の解明などが高く評価された。

本論文の意義は、以下の二点にまとめられる。第一は、植民地台湾に関する日本人作家の作品と、台湾人作家による日本語文学を多角的にとりあげている点である。日本人の中の多様性、台湾人の中の多様性が、それぞれに検討されており、日本の植民地主義が台湾において生成した共同体の中のヒエラルヒーが解析されている。「関係」を鍵概念として、植民者と被植民者の関係、複数の男性性の関係、複数の女性性の関係が分析され、植民地における近代化のプロセスの動的な変化が明らかにされている。とくに、台湾人社会における近代化の状況の分析に、國分功一郎が提示した「中動態」という概念を導入した点は、評価された。近代／前近代、能動／受動という基準で振り分けることの難しさを指摘したうえで、「非自発的同意」として理解しうる状況が文学作品の読解を通して具体的に解明されている。

第二には、男性性研究において近年重視されている男性性の複数性という観点を採用し、植民地台湾における弱い男性性に注目した点である。先行研究ではとりあげられることのなかった男性登場人物に目を向け、霸権的男性性への憧れを示しつつも「成功」に至らない状況に焦点を絞ることで、協力／抵抗という二項対立におさまらない問題、個人の意志に還元しきれない問題が論じられている。作品分析としての新しさがあるだけでなく、私的領域における主体の生成を描き出す文学作品の特質を生かし、植民地時代の台湾社会のより緻密な理解に到達している。

課題としては、本論文に取り上げられた台湾人作家が『台湾文学』という雑誌への参加者に限られていたため、立場の異なる『文芸台湾』に参加した作家なども視野に入れることで、より全面的な理解が可能になるのではないかという指摘や、男性表象と女性表象がそれぞれに分析されているので両者の比較を加える必要があったのではないかということなどが指摘された。それらの論点は今後、検討されるべき課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。